あさひかわ新聞　2010年（平成22年）12月28日号

『坂の上の雲』を超えて

「私たちは今、長い衰退のトンネルの中にいる。『坂の上の雲』を夢見て山を登り、その頂きに立った途端、この国は目標を失った」

これは、一年前に公表された政府の「新成長戦略」の一節です。何ともショッキングなフレーズですが、先日ある若手経営者が「僕たちの世代は、バブルを知らない」と発言したのを聞き、はっと気がつきました。旭川の明日を担う人材が、日本経済の上り坂の時代を、ビジネスでは知らないのです。バブル崩壊後の時期を衰退のトンネルと呼ぶならば、本当に長いトンネルです。

常磐公園にて。雪には、凛とした美しさがある

実際、バブル崩壊後の九〇年代以降、わが国の成長率は、先進国の中でも下位グループに属する状況が続いています。バブルの後始末に追われて低成長が続く中、閉塞感が強まり、期待成長率は低下しました。この結果、お金は前向きな投資や消費に向かわず、需要不足から日本、そして旭川の経済は、デフレに苦しんでいます。

人口が減少する中、成長率を底上げするためには、労働生産性を高める必要があります。鍵となるのは、企業が得意分野を伸ばし、ニッチを見つけ、成長分野を開拓することです。リスクをとって起業する人へのサポートも重要です。

成長率の低下は、根が深い問題だけに、一朝一夕で解決するものではありません。企業だけでなく、それを支える金融機関も、政策当局も一体となり、粘り強くこれを克服する努力を積み重ねる必要があります。日本銀行では、この夏から金融機関に対する「成長基盤を強化するための資金供給」に取り組んでいます。これに呼応し、一部の道内金融機関では、新たなファンド創設を公表しました。

海外に目を転じると、世界経済は四十年間ずっと年平均四%のペースで成長を続けています。旭川の食品・観光産業などの目の前に、ばく大な潜在市場が存在しています。

日本は幕末や戦後の混乱期を乗り越えて、坂の上の雲までたどり着きました。その先にも、新しい頂きは必ずあるはずです。これを探し出し、目指す動きが、旭川発で広がっていくことを期待したいと思います。

日本銀行旭川事務所長

（毎月第4週に掲載します）

荒木光二郎（あらきこうじろう）　一九六〇年（昭和三十五年）愛媛県生まれ。八三年（同五十八年）日本銀行に入行。米国イェール大学留学、日本格付投資情報センター出向、調査統計局企画役などを経て、一〇年（平成二十二年）から旭川事務所長。趣味は旅行、写真、音楽鑑賞、翻訳。